

日本赤軍の同志たちへ

塩見孝也

日本赤軍の同志諸君は五・三〇リッダ闘争をはじめとする国際遊撃戦をもって反帝・反社帝・反シオニズムのバレスチナーアラブ革命闘争を闘いぬいてきた。これらの闘いはバレスチナーアラブ人民の階級的、民族的欲求に応えている点において人民の中に深く根をおろした闘いであり、同時にプロレタリア国際主義を志向せんとする日本人民の面目を大いにほどこしてくれた闘いであった。この闘いを契機にして日本人民のプロレタリア国際主義の闘いは一段と活発になり、日本・バレスチナーアラブ人民の国際主義の友誼はいっそう深められていった。そればかりではない、日本赤軍の闘いは、連赤問題以降の後退戦の中で「左」右の日和見主義、清算主義と闘い、逆流に抗した側面を有していた点においても、我々は高く評価するものである。そして、グローバルな世界革命戦争の相互関係の側面からみるならば、この闘いは国際

つ。彼等は真正正銘のプロレタリア民族主義派であり、国際帝国主義、社会帝国主義、シオニズム、アラブ・ブルジョア民族主義、あるいは封建反動と徹底して闘争する階級に基礎をもたない。他方、小ブル急進民族主義は、プロレタリアートと結合し切れないし国際帝国主義、社会帝国主義、ブルジョア民族派を批判しきれない。マルクス・レーニン主義の路線のみが、新民主主義革命から社会主義革命の連続革命の道を歩めること、それ故にこのような路線を追求しているPFLPの同志達と連携し、日本赤軍の同志達はより一層マルクス主義の立場を深めPFLP等プロレタリア革命派や、左翼民族派を統合するよう思想的・政治的理論面でもマルクス主義の指導力を発揮しなければならぬ。二つは、ソ連の「口先だけの社会主義、実際は帝国主義」の階級的性格をはっきりさせ反帝国主義、反社会帝国主義の世界革命戦略を確認し、その推進力を中国共産党が担っていることを認めるか否かの問題です。とりわけ中国が社会帝国主義に真向から対峙することによって、全世界人民を存分に決意させる偉大な後方となっていること、この点に於いて我々とは幾つかの点で原則的相違がありつつも—実質上の世界革命の統合同司令部の役割りを中国が果しているか評価するか否かです。この問題はバレスチナー革命に於いて

プロレタリアート人民の反帝・反社帝二正面持久的対峙戦略の積極的一翼を形成していたものと考ええる。

日本赤軍の同志達は共産主義者同盟赤軍派を母胎として出生し、赤軍派の過渡期世界の革命的総路線とその主要な一環としてあった国際根拠地路線を実行に移し、それを発展させた点に於いて、赤軍派の路線を継承・止揚・発展させんと苦闘してきた我々にとって大いなる鼓舞、激励であり、また赤軍派の誇りを高めた。それ故に日本赤軍の同志諸君によって、今、またあらためて提出されている〈世界革命統一戦線—日本協議会〉の方向は、我々の提出しているプロ単一党—プロレタリア武闘共闘の原則と矛盾しないし、原則的一致を獲ちとれる方向にあると考える。だからこの協議会の闘いを、我々は、我々のプロ単一党—プロ武闘共闘の闘いとして積極的に担うことを約束するものです。以上の基本的な立場をふまえた上で、以下、二、三の留意点を提出しておきたいと思います。

アラファト等、和平派との党派闘争はマルクス主義の立場にたつてこれを把えるならば以下のような意味をも

も、反帝闘争と同時に反社帝闘争が重大化している点に於いて決定的な問題になっていると考えるのですが——。

第三はテロリズムの問題です。我々はテロリズム一般を否定するものではない。しかし一般的にいつて連赤問題を正しく総括しきれず現在の複雑で高度な階級関係に切り込まず、ここからはじき出され、階級敵につけいられるような闘いは、労働者人民が綱領・党建設・階級依拠路線をもって建軍—攻撃的蜂起のプロレタリア革命戦争の大道への前進を開始している時、労働者人民の闘いを混乱させる危険があること。従って、我々はこのような傾向に厳然と自己を区別しなければなりません。とりわけ、テロリズムの傾向を、自分は闘わずして讚美し、寄生し、これを利用せんとする党派とは断乎として闘争するものです。第四——六十年代末以来誕生した武闘派は連赤問題以降の階級闘争の新たな段階を迎える中で、この情勢に主体的に切り込むための新たな生長を問われて既に久しい。そしてこの鍵は正しい綱領と階級依拠路線を獲得し、大なり小なり自然発生的に小ブルの性格をもった諸派、諸グループ、諸個人をプロ単一党に昂め統合することにあります。武闘の推進との関連で述べれば、正しい綱領と党建設の前進をバネにして、プロ人民を、党建設を芯棒とする革命戦争・蜂起の陣型に組織するこ

とによって、党の中に武装力を蓄積し、この力を全人民の武装へと発展させていくことです。

相対的安定期に発展した小ブル革命派の革共同系の反帝反スタ運動は、「一国社会主義建設批判」、「二段階戦略批判」を踏み絵にすることによって、第三世界の民族解放・社会主義勢力とその指導部中国共産党に敵対し、国内的には、下層プロ等70年代革命勢力に反スタマルクス主義の思想性、理論故に結合できず、一部は反毛反スタ主義を徹底して社会帝国主義に転落しています。ブンド系革命派は、この革共同主義を克服せんとして武装闘争を闘い、反スタトロツキズムを克服する作業に着手したが、ML主義に立脚すること、毛沢東思想を支持することに不徹底で、党的団結を保持し切れず、分散化していった。他方、もう一つの小ブル革命派の翼たる毛教条派は、人民民主主義革命路線をとることによって、民族主義、合法主義、経済主義の域を出ていない。総じて、相対的安定期の産物たる反スタトロツキズムや毛教条主義は保守反動化し、又これを止揚せんとしたブンド系も動揺を繰り返し、プロ単一党の任務に応えていないこと。しかし、ベトナム―印度支那革命の勝利を始めたとする、民族解放・社会主義革命の大爆発、この大後方にして、指導部の革命中国の継続革命の前進と威信の増大、他方

での、帝国主義の没落と、ソ連社会帝国主義の帝国主義としての本性の露呈、といった国際情勢、また安保大会戦を武闘の機軸としつつ闘った革命派が、その敗北の中で、自らの小ブル性を反省し、70年代革命勢力を支持し、この階級苦をマルクス主義で対象化し、結合をめざし、又、国際革命勢力との結合を毛沢東思想を支持しつつ反スタトロツキズムと毛教条主義をマルクス主義で同時相互止揚する方向でめざすことによって、飛躍的に成長してゆきつつあること。それ故に「小ブル革命主義をプロレタリア革命主義へ」、「毛沢東思想を支持し、反スタトロツキズムと毛沢東教条主義を同時相互止揚」する反帝反社帝のプロ独・社会主義革命の路線、経済主義とテロリズムを排した建党―建軍の攻撃的蜂起の陣型をもったプロ単一党の志向が人民の声となつてゆきわたり始めていること。従つて安保大会戦をその最先頭になつて闘い、今も最前線に踏みとどまつて闘っている人々は、このようなプロ単一党の方向に自らの総括と任務の方向を定め、結集してゆかなければならないこと、このことです。

革命戦争の時代のプロバガンダ

布川 徹 郎

世界地図に明示されていない国境から、国家の都市の中枢から、民族を超え、国籍を超え、この時代を超えようと、メッセージが送られてくる。

そのメッセージはプロバガンダは、肉体しか奪われることのない者と、観念しか奪われることのない者の出会いから、武装闘争によって組織された〈幻の民族〉の自己表出である。

これは、パスポートによって国境を越える国民にとって、日常の中で街にいる市民にとって、歴史の内に記述された暴力革命の認識よりも、報道の内に知らされる戦争の悲惨よりも、それは恐怖である。

「人類の到達し得た最高の文化形態・管理形態は国家である」。国家は矛盾の形骸であり、国境は矛盾の象徴であり、国際連合は矛盾の隠蔽機関である。

肉体しか奪われることのない者と、観念しか奪われることのない者の、武装によってするプロバガンダは、国家によって管理された想像力に、国際連合に処置される世界に、敵対する。それは何よりも、日常性への告発ではなく、既にある思想の実践ではなく、定住する国民・市民への連帯ではない。

既に在る日常、既に在る思想、既に在る国家社会の価値基準から飛び出さんとする者達の、この近代社会の価値の増殖に奪われることのない行為の倫理と論理は、近代社会の疎外の系譜を超えて、歴史の過去と現在の抑圧されてあった、人類への愛の未来なのだ。

地図上に明示されていない国境からのプロバガンダは、国家の集合体である国際連合に認知されていない民族のプロバガンダは、武装闘争であり、新しい時代への革命戦争である。

(ぬのかわつてつろう・映画作家)